Ⅱ－1　学生による日本語教育プログラムの評価　調査報告
――授業評価とカリキュラム改善の連結をめざして――

鈴木庸子

1　調査の目的と全容

ＩＣＵ日本語教育プログラムでは１９９０－９１年冬学期の学期末から毎学期末に学生による日本語教育プログラムの評価を行っている。この評価は資料１に示すようなアンケートによるものである。

このアンケートを実施した目的は、第一に１９９０年度の夏期日本語教育から試用している新しい初級日本語教科書と、これを用いた初級のコースに対する客観的な評価を学生から得て、教科書改訂の資料とすることである。第二に、日本語教育プログラムの各コース責任者が、各自のコースのカリキュラム、教授法などに対する学生の意見を求め、学生のコースに対する満足度を知ることによって、コースの運営を反省し各々のコースを向上させる資料を得ようとしたことである（注１）。

アンケートは、教師が立ち会わない教室で一斉に記入させ、学生のひとりに集めさせて直接日本語科事務室の秘書に手渡してもらった。各コース責任者は学期末の成績提出の後に、担当コースのアンケートを受け取り、アンケートの結果をスタッフミーティングで報告することが義務づけられた。

アンケートの内容は、資料１に示すように、学生の学習時間、日本語を使用しているかどうかなどの学習環境の調査、コース全体に対する意見、教材、カリキュラム、教師に対する意見などを、記述式で求めるようになっている。

この調査を初めて一年が経過し、延べ３００人以上からの資料が集まった。延べ３００人の内訳を表１に示す。おりから、日本語教育プログラムはカリキュラムの改編をせまられている時期でもある。ここで各コースのカリキュラムに対する反省としてでなく、日本語教育プログラム全体に対する総括的な評価としてこのアンケート調査を見直し、カリキュラム改編の資料を得ようとする試みは意義があると考えられる。そこで、これまで、各コース別に集計してきたものを全体的に集計しなおし、項目別にまとめることにした（注２）。

集計は、村野良子、平田泉、山下早代子、田中真理、鈴木庸子が分担して行い、それぞれ報告書をまとめることとした。

本稿では、鈴木が①学生の授業外の学習時間、②日本語の使用状況、③コース全体に対するコメント、④宿題に関する意見、⑤時間割に関する意見を集計して報告する。

表１　調査対象（調査時期、コース別）

学期	コース名	回答者数(人)
1990-91年冬学期	集中日本語３	8
	日本語　２	5
	日本語　３	8
	日本語　４	15
	日本語　５	20
	日本語　６	16
	上級日本語	5
	特別日本語	34
1991年春学期	集中日本語３	6
	日本語　４	3
	日本語　５	17
	日本語　６	19
	上級日本語	9
	特別日本語	1
1991年秋学期	集中日本語１	16
	集中日本語２	10
	日本語　１	10
	日本語　３	23
	日本語　４	14
	日本語　５	23
	上級日本語	7
	特別日本語	32
	合計	301

２　集計の結果

（１）　学習時間

表２に示すように、日本語教育プログラムの学生が、家で日本語学習の予習復習のためにあてている時間の１日の平均は、全体で１時間４０分、特別日本語の学生を除くと１時間５４分、集中日本語の学生の場合は３時間１８分、日本語１から日本語６まで及び上級日本語の学生の場合は１時間３６分、特別日本語の学生は１時間１２分となっている。予想されることであるが集中日本語の学生の家での学習時間は、他の学生の約２倍と考えて良い。また、全体的な学習時間としては１時間以上３時間未満と考えて良い。特別日本語の学生には１時間未満の学習時間と解答しているものの割合が３０％近く、これは他に比べて格段に多い。

表２　コース別　１日の学習時間（授業外）

	回答数			
時間	ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ 全体	Sp.を除く全体*	集中日本語	日本語＋上級
0-1	44人 (15.4%)	25人 (11.3%)	1人 (2.8%)	24人 (13.2%)
1-	110 (38.5)	79 (35.7)	1 (2.8)	78 (42.9)
2-	71 (24.8)	60 (27.1)	7 (19.4)	50 (27.5)
3-	34 (11.9)	32 (14.5)	13 (36.1)	19 (10.4)
4-	13 (4.5)	11 (5.0)	6 (16.7)	5 (2.7)
5-	12 (4.2)	12 (5.4)	6 (16.7)	6 (3.3)
many	2 (0.7)	2 (0.9)	2 (6.3)	0 (0.0)
合計	286人	221人	36人	182人
平均	1.7時間 （１時間40分）	1.9時間 （１時間54分）	3.3時間 （３時間18分）	1.6時間 （１時間36分）

時間	I-1**	I-2	I-3	J-1	J-2	J-3
0-1	1(6.7%)	0	0	1(10.0%)	0	5(17.2%)
1-	1(6.7)	0	0	4(40.0)	2(40.0%)	16(55.0)
2-	3(20.0)	3(30.0%)	4(28.6%)	3(30.0)	0	7(24.0)
3-	5(33.3)	4(40.0)	4(28.6)	1(10.0)	2(40.0)	1(3.0)
4-	1(6.7)	1(10.0)	4(28.6)	0	1(10.0)	0
5-	2(13.3)	2(20.0)	2(14.3)	1(10.0)	0	0
many	2(13.3)	0	0	0	0	0
合計	15人	10	14	10	5	29
平均	3.2時間	3.2	3.3	1.9	2.4	1.2

時間	J-4	J-5	J-6	Advanced	Special
0-1	5(16.7%)	8(14.8%)	3(9.0%)	2(9.5%)	19(29.2%)
1-	6(53.3)	17(31.5)	14(42.4)	9(42.9)	31(47.7)
2-	4(12.2)	21(38.9)	10(30.3)	5(23.8)	11(16.9)
3-	5(16.7)	4(7.4)	4(12.1)	2(9.5)	2(3.1)
4-	0	2(3.7)	1(3.0)	1(4.8)	2(3.1)
5-	0	2(3.7)	1(3.0)	2(9.5)	0
many	0	0	0	0	0
合計	30人	54	33	21	65
平均	1.4時間	1.7	1.7	1.9	1.2

* Sp.を除く全体＝特別日本語を除いた全体

** I-1、I-2、I-3 ＝ 集中日本語Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ(Intensive Japanese)

J-1～J-6 ＝ 日本語Ⅰ～Ⅵ(Japanese)

Advanced ＝ 上級日本語(Advanced Japanese)

Special ＝ 特別日本語(Special Japanese)

（２）　授業以外の日本語使用

授業以外に日本語をよく使いますかという質問に対して、表３に示すように全体の８５．７％の学生が「はい」と回答している。話ことばとしての日本語にはいっさい支障がないと考えられる特別日本語の学生は１００％が「はい」と回答しており、この数字を除いたいわゆる外国語として日本語を学ぶ学生の場合には、１８０名８１．４％が「はい」と回答している。

今回の集計では、記述式の回答を求めているため、回答の中には「ときどき使う」と答えたものも多かった。集計にあたっては、この回答は日本語を使うチャンスがあるとみなして「はい」の回答として処理したが、もし、「ときどき」という回答を「いいえ」として処理すれば結果はかなり異なってくるだろう。

日本語を「よく」使いますかと尋ねた場合、学生が考える「よく」の内容は主観的である。どの程度のレベルの日本語でどのような内容の日本語を使えば「よく使う」と解釈できるのかは学生によって異なっている。初級の学生は日常生活用語を使えれば「はい」と答えるし、中、上級の学生は日本語だけであらゆる意思の疎通をはかる状況に対して「はい」と答える。どの程度の日本語を使いたいか、どの程度、日本語だけの世界にひたりたいかという学生の期待感によって「よく」の中身が左右されるといえる。たとえば、日本語１の学生は全員が「よく使う」と回答している。しかし、日本語１の学生が使うことのできる日本語は当然日常生活のことばに限られている。日本語１の学生にしてみれば、日常生活で日本語を使えるようになったことは「よく使う」というレベルなのであろう。これに対して、日本語６の学生は２１％の学生が「あまり使わない」と答えている。日本語６のレベルの学生であれば、店や郵便局で当然日常的な日本語を使用していると考えられるがその程度の日本語ではかれらは「よく使う」とは思えないのではないだろうか。

「日本語をよく使う」と考えて満足している学生は別にして、使っても「ときどきしか使わない」「あまり使わない」「期待するほど使っていない」と回答している学生の存在は問題である。これは日本へ来て日本語の中にひたりきって日本語を向上させたい学生にとって、外国人学生が多く、日本人でも英語を使える学生の多いＩＣＵが、かれらの期待にそっていないことを示しているといえよう。それと同時に、日本の社会にどのように入っていくかは学生個人個人の問題でもある。「使いたくても日本語を使う場所がない」という不満に対して、どのように環境を作るのか、どのように学生個人を導くのか、今後の留学生教育の課題となるのではないだろうか。

表３　授業以外の日本語使用

「日本語をよく使いますか」という質問に対する回答

	全体	Sp.以外	集中日本語	日本語＋上級
はい	246(85.7%)	180(81.4%)	30(75%)	150(82.9%)
いいえ	41(14.3)	41(18.6)	10(25)	31(17.1)
合計	287人	221人	40人	181人

	I-1	I-2	I-3	J-1	J-2	J-3
はい	10(63%)	9(90%)	11(79%)	10(100%)	3(60%)	27(93%)
いいえ	6(37)	1(10)	3(21%)	0	2(40)	2(7)
合計	16人	10人	14人	10人	5人	29人

	J-4	J-5	J-6	Advanced	Special
はい	22(80%)	5(82%)	26(79%)	17(81%)	66(100%)
いいえ	6(20)	0(18)	7(21)	4(19)	0
合計	28人	5人	33人	21人	66人

（３）　コース全体にたいするコメント

アンケートの３番目の質問としてコース全体に対するコメントを記述式で記入させた。漠然とした質問なので学生も様々な側面から回答している。学生が寄せた回答は大きく次

の項目に分類できる。学生達は、コース全体と言っても「良い、悪い、まあまあ」などのような抽象的な評価で満足の度合いを表現するだけでなく、その時点でもっとも関心のあることがらを（とくに不満な点が多いが）記述しているようである。

（a）　全体的な満足の度合い（すばらしい、良い、悪い、まあまあ、役に立つ、上達した、クラスは時間の無駄が多い、楽しい、向上が必要等）
（b）　ペース（速い、遅い）
（c）　コース設計上の問題（スピーキングが少ない、作文が少ない、成績がきびしい、よく設計されている／いない、クラスのサイズが大きい、スケジュール通りでない等）
（d）　教材（おもしろい、時代遅れ、多すぎる、実用的でない、日常生活と違う次元の問題を扱ったので良い／良くない、テキストはよくないがビデオはよい等）
（e）　教師（きびしい、良い、文法の説明が上手／下手）
（f）　その他（テストで不正があった、教室内で英語を話しすぎる、前学期にくらべ何も変わっていない等）

この回答から学生達の全体的な満足度を端的に示すことは難しい。「どのぐらい満足していますか」「期待通りに上手になったと思いますか」「授業時間は有効に使われたと思いますか」などの項目を５段階評価させるなど、今後は質問に工夫をしたほうがよいだろう。学生はしばしば「このコースはたいへん効果的だと思うが、もう少し文法をよく説明してほしかった。でもとても上手になったと思う。」のような書き方をするが、このようなコメントは学生の気持ちを知ることはできても、コース全体の評価としては扱いにくいからである。なお、コース設計上の問題、教材、教師などについてはこの後に質問の箇所があり、そこで分析するのが妥当である。ただ、学生にとって関心の高い問題点を把握するという意味で、どの項目に関して学生の言及があったかを知ることは無駄ではない。そこでコース及び項目別に言及された回数を表４に示す。また、全コースを通して肯定的に評価されていると考えられる記述と否定的に評価されていると考えられる記述の回数を示す。全体的な学生の満足の傾向がわかると思う。

なお、回答の中に「先学期も同じアンケートを行ったが、今学期になって何の向上もなかった」というコメントがあった。心にとめるべきコメントだと思う。コースの評価を求める以上、私達は何らかの対応をするのが当然であろう。すぐに改善できない場合、変更をしない場合でも、その理由を学生に告げるべきだと考えられる。また、教師が改善をしたつもりでも学生にそのように受け止められていないための誤解の可能性もある。学生のコメントに対して誠意のある対応を心がける必要があるだろう。

表４　全体のコメントに指摘された問題点の範疇（人）

	I-1	I-2	I-3	J-1	J-2	J-3	J-4	J-5	J-6	Adv.	Sp
全体的な満足	8	3	11	3	0	3	9	4	10	8	22
ペース	4	0	1	2	1	3	0	2	5	0	1
コース	2	1	3	3	2	3	8	5	7	7	7
教材	0	3	1	0	0	1	3	5	3	3	4
教師	1	0	1	2	1	1	1	1	1	0	1
そのほか	0	0	2	0	0	1	0	0	3	0	1

（「良いコースだが、自由会話をもっとしたい」のような記述では、「良いコースだが」の部分は集計に含めなかった。儀礼的なものと判断したためである。）

表５　全体的な評価における肯定的評価と否定的評価

	肯定的評価	否定的評価
全体的な満足	９５件	２３件
ペース	２	速い　７件 遅い　９件
コース	１５	１９
教材	４	１８
教師	４	３
その他	０	５

（4）宿題に対するコメント

アンケートの3番目の項目として宿題について記入式でコメントを求めた。

宿題の内容は、各コースによって出している課題が異なるが、初級のコースでは筆記による文法の練習問題、作文、中級では文法の練習問題、作文、読解問題、タスク形式のインタビュー等が課されているようである（注3）。特別日本語では、漢字を覚えるもの、新聞を読んで要約文を書くもの、作文などが課されている。

これらの宿題に対する学生のコメントは、全体的な評価、宿題の量、出し方、内容に対する意見の4つの範疇にわけられる。以下にそれぞれについて学生のコメントの主なものを記す。

（a）全体的な評価（良い、ふつう、まあまあ、役に立つ／立たない、助けになる／ならない、無用、宿題はなかった等）

（b）宿題の量（多い、少ない、大変である、不十分、もっと出してほしい、適当）

（c）出し方（テストの前に／提出した翌日に返却してほしい、クラスの中で解答してほしい、正解がほしい、設問の意味を明確にしてほしい、一度に何種類も出さないでほしい等）

（d）内容（むずかしい、よい練習になる、つまらない／もっと創造的にしてほしい／バラエティがほしい、会話／作文の宿題をだしてほしい等）

これらの回答について、肯定的評価と否定的評価の回答数を集中日本語と日本語のコース、特別日本語のコースに分けて、表6および表7に示す（上級日本語は別稿を参照のこと）。このような区別をしたのは、特別日本語のコースが他のコースとやや異なった傾向を示すと考えたからである。つまり集中日本語等のコースの学生は特に不満がない場合には単純に「良い、良くない」と回答し、宿題の内容が良いのか量が良いのかは明かにしない。そして、何か不満がある場合にのみ、量や、出し方、内容について個別的にコメントを書いているようである。これに対して特別日本語の学生はただ「良い、役にたつ」のような回答ではなく、「適量である、作文は時間がかかる、新聞を読めて良かった」など、個別に評価する傾向がある。

表6および表7に示されるように全体的には肯定的な評価が否定的な評価を上回っている。しかし、学生のコメントは、同じコースに対してであってもほとんどの場合に学生によって意見がわかれている。たとえば、「役に立つ」と回答する学生があれば必ず「役に立たない、大事でない」と回答する学生があり、「多すぎる」と回答する学生があれば必ず「十分でない」と回答する学生がある。また、「つまらない、チャレンジングでない」

表6　宿題に対する肯定的評価と否定的評価（集中日本語および日本語のコース）

	肯定的評価	否定的評価	計
全体的な評価	95(60.5%)	13(8.3%)	108(68.7%)
宿題の量	5(3.2%)	多い　11(7.0%) 少ない 13(8.3%)	29(14.5%)
出し方	6(3.8%)	7(4.5%)	13(8.3%)
内容	1(0.06%)	6(3.8%)	7(4.5%)
合計	107(68.2%)	50(31.8%)	157(100%)

表7　宿題に対する肯定的評価と否定的評価（特別日本語のコース）

	肯定的評価	否定的評価	計
全体的な評価	18(28.6%)	6(9.5%)	24(38.1%)
宿題の量	15(28.1%)	多い　3(4.8%) 少ない　3(4.8%)	21(33.3%)
出し方	0(0.0%)	2(3.2%)	2(3.2%)
内容	4(6.3%)	12(19.0%)	16(25.4%)
合計	37(58.7%)	26(41.3%)	63(100%)

と回答する学生がいるのに対して「文法の形を練習するために良い」と回答する学生があると言った具合である。

意見がわかれる原因は、主に学生がそれまでに培ってきた学習スタイルの違い、学習意

欲、日本語の能力の差、および質問に対する解釈の違いによると思われる。

たとえば初級のコースのコメントとして、「まるで高校生のようだ」というものがあった。これは、文法の正確さを習得させるために作られた練習問題に対する意見であり、おそらくヨーロッパ系の学生からのものと思われる。ヨーロッパの教育では高校までの教育のありかたと大学での教育のありかたが異なる。そして日々宿題が課され、そのできばえが成績に組み込まれていく制度は高校のものであって、大学のものではない。そこでヨーロッパ系の学生にとって現在日本語教育プログラムがとっている制度は、受け入れにくいものである可能性が十分にある。つまり、学習スタイルにあわないのである。このような場合に学生に対し、納得するしないは別としてなぜＩＣＵ日本語教育プログラムでこのような制度をとっているか十分説明することが必要であろう。

中級のコースのコメントでは、「予習復習で精いっぱいでそれ以上のことは何もできなかった」「宿題が多すぎる」「宿題といえるものは何もなかった」という意見がでている。これは何を宿題と解釈するのか解釈のしかたが学生によって異なっているものと思われる。たとえば、スピーチの準備などを宿題と考えるか予習と考えるかの解釈である。このような混乱を避けるためには、課題の内容を明確に示した上でそれがどうだったか記述させる必要がある。

学生が全体的な評価として用いることばは「よい、よくない」の他に「役に立つ、助けになる」などに類するものが目につき、この評価の記述の１４％を占める。学生にとって役に立つかどうかが重要な尺度となるようである。

宿題の量に関するものは多い、少ないという不満が主である。宿題の出し方については速く返してほしい、授業中に解答を説明してほしい、解答を示してほしいなど、フィードバックに関する不満が多い。このコメントは教師が常に心するべき点であり、改善が期待される。

内容に関して、スピーキングの宿題を出してほしい、もっと創造的な宿題を出してほしい、バラエティがないなどの回答は学生の積極的な姿勢を現していると考えられる。教師は、コースの到達目標や宿題の量のかねあいを考慮しつつ、なおこれらの積極的な態度の芽をつまないように心がける必要があるであろう。

（４）時間割に関するコメント

アンケートの５番目の項目として時間割について記述式で意見を求めた。

学生のコメントは全体的な評価、時間帯、コマ数、個々のコースのカリキュラムに対する意見に分けられる。

日本語教育プログラムのコースは、(A)週２２コマあるタイプ、(B)月曜日から金曜日まで１、２限の授業があるタイプ、(C)月曜日と金曜日が１限から３限まで、火曜日と木曜日が１、２限で水曜日が休みになるタイプと、(D)月水金の２限または４限（セクションによる）のタイプと(E)月水金の３限から５限まであるタイプにわかれるが、それぞれのタイプによって学生のコメントは一定の傾向が見られる。そこで表８にそれぞれのタイプ別に学生の評価と回答数を示す（タイプＥは上級日本語のコースなので、別稿を参照のこと）。

表８　時間割に対するコメント

	タイプＡ	タイプＢ、Ｃ	タイプＥ
全体的な評価	良い、ＯＫなど　１３	５１	３８
時間帯	１限はない　２ ほうがよい	朝早すぎる　４４ 水曜を休みに　２ 毎日に　１	
コマ数	半日でよい　７ 長い、疲れる　６ 効率が悪い　２	３ｺﾏ続きは長い　６ 多い　１ 少ない　１	週３回が多い２ 少ない１
カリキュラム	よく構成され　５ ているなど	進度が速い　１０ 構成に関して　３	他の一般教育の 授業と重ならな いように　６ 内容について１
その他		３	

タイプＡ（週２２コマあるコース－－集中日本語）
タイプＢおよびＣ（週１０コマ、月～金１、２限／月金１～３、火木１～２－－日本語コース）
タイプＤ（月水金２限または４限－－特別日本語のコース）

この結果をみると学生によって、大学あるいは日本語教育プログラムで決められた時間割に対して回答している場合と、それぞれのコースのカリキュラムに対して回答している

場合の２種類の回答があることがわかる。したがって、全体的に「良い、ＯＫ」などと回答している場合には何に対して満足しているのか判断することができない。このような混乱をさけるために設問を修正する必要がある。

個々の学生の回答を分析してみると、プログラムの時間割に対して、集中日本語の受講生（タイプＡ）の中には半日にしてほしいという意見があり、一方日本語の受講生（タイプＣ）の中には一日３時間（半日）は長すぎるという意見がある。コマ数の長さに対する受けとめかたは学生によってかなり異なると言えるだろう。

また、タイプＢおよびＣの学生の場合、毎日授業があれば水曜日を休みにしたい学生がおり、一方水曜日が休みの時間割の場合には毎日にしてほしいというコメントがでる。すべての学生の要望をかなえることは不可能ということであろう。

タイプＢおよびＣのコースからのコメントとして顕著なものは時間が早すぎるという点である。特にタイプＢの学生は９月に日本に来てから３学期間、月曜から金曜まで週５日毎日８時半から授業がある。学生によってはこの時間帯のためにコースを脱落するものも現れている。また学生の遅刻、欠席、かぜひきがめだち、さらに朝食をぬいて授業に来るために１限と２限の間の休みに朝食をとり、そのため休み時間が長くなりがちになる。学生に対して厳しくするべきか、もう少し楽な時間帯に変えるよう努力するべきか迷うところである。

３　まとめ

以上、１９９０年から１９９１年にかけて行った授業評価のアンケートの集計のうち、学習時間、日本語との接触、全体的なコメント、宿題、時間割について報告を行った。

このアンケートは１年間にわたって各学期末に行ったので、同一の学生が異なったレベルのコースに対してであるが、繰り返して回答している。したがって、その学生は恐らくどのコースでも同じような傾向の意見を述べている可能性がある。例えば常にペースが速すぎると答えているかも知れない。そのため今回の集計で得られた回答数そのものには統計的な大きな意味はないと言える。

しかし、少なくとも今回の集計で、全体として学生の学習時間は１時間から３時間であること、日本語との接触は、個人差があるもののすべての学生が満足できる環境にいるとは言えないこと、プログラムに対してある程度満足していること、ただし、個別的に進度や宿題の量や時間割やカリキュラムに対して不満を持っている学生もいることがわかった。

各コースでは、アンケートの結果に基づいて必要なカリキュラムの改善が個別に行われているはずである。しかし、プログラム全体としては特に改善善が行われてこなかったので、今後、時間割の問題、コマ数の問題を検討する必要があるだろう。また、今後も学生

による授業評価は続けて行うべきであろう。ただし、アンケートの設問の仕方については今回の集計をひとつの資料として、より正確に学生達の意見を把握できるよう、改良できると思う。たとえば、宿題についてたずねる場合、「勉強の役に立ったかどうか、量は適当だったか、フィードバックは適切だったか、内容は難しすぎないか」などの項目をたて、５段階評価させるなどの方法が良いのではないだろうか。

注１）日本語教育プログラムのコースの種類と開講される学期

注２）実際に回収されたアンケートはここで集計に用いられたもの以外にもあるはずだが、もともと各コース別にとりまとめる目的で実施されていたため、一部が散逸したものがある。そのため今回の調査の対象となったのが、表１である。

注３）上級の宿題については別稿「上級コースの概要と学生の評価」（田中真理）を参照のこと。